

14 和歌に魅せられた作家ジュディット・ゴーティエ

作家のジュディット・ゴーティエ（1845-1917）は、同じく作家のテオフィル・ゴーティエの娘としてパリに生まれました。1862年に父親と訪れたロンドン万国博覧会で初めて日本人に接し、日本に関心を持ちました。翌年、父親が雇った中国人家庭教師から中国語を習い、中国詩集の翻訳や小説を出版しました。ゴーティエはフランスに滞在する日本人とも交流を持つようになり、日本を題材にした小説も発表しました。



Judith GAUTIER
(National Diet Library, Japan)
ジュディット・ゴーティエ
(国立国会図書館)

ゴーティエは、1885年に「蜻蛉集」（せいらいしゅう）という仏訳した和歌集を出版しました。和歌（又は短歌）とは、31（5、7、5、7、7）の音節を持つ五行詩です。和歌は、日本の伝統的な定型詩の中でも、最も古くから存在する形式の詩歌です。8世紀に編纂された日本で最も古い和歌集である「万葉集」には、天皇、貴族、防人、農民など様々な身分の人が詠んだ歌が約4500首も収められています。その後も数多くの和歌集が編纂され、現代に伝えられています。長い間、日本人は、愛する人への思い、死者に対する悼み、自然の美しさや四季の移り変わりなど、様々な感情や経験を歌で表現しました。

蜻蛉集の最初のページには、「日本国天皇参与の西園寺公望の逐語訳によりジュディット・ゴーティエが日本語から翻訳し、山本芳翠の挿絵による」と記載されています。

西園寺公望とは、当時パリに留学中で、後に内閣総理大臣となった人物です。ゴーティエからの依頼を受けて、古今和歌集の中から88首を選んで逐語訳をしました。それをゴーティエが五行詩に翻訳し、パリで絵画を学んでいた山本芳翠が描いた美しい挿絵を添えた詩集にしました。日仏の合作によって、フランス人に分かりやすく日本の古典文学を紹介する素晴らしい作品が生まれました。

14 和歌に魅せられた作家ジュディット・ゴートイエ

Pour cueillir la branche
Dont l'eau berce la couleur
Sur l'eau je me penche:
Hélas! J'ai trempé ma manche
Et je n'ai pas pris de fleur!
La princesse Issé

春ごとに
ながるる河を
花と見て
をられぬ水に
袖やぬれらむ
伊勢



掲載日：2022 年 4 月 1 日